

リンは子猫を片手で抱きかかえると猫用の哺乳瓶を口にくわえさせた。

両前足で押すような仕草をしながらごくごくとミルクを飲むそのさまがとても可愛らしい。

(はああああー、癒されるー♪)

リンは毎週ボランティアとして参加している保護猫のNPOの一室にいた。

『早く飲ませてー!』

『お腹すいたー!』

足の周りでミルクの順番待ちをしている子猫たちがミーミーと鳴きながらリサも含めたスタッフたちの足にすり寄っているが、リンの耳には子猫たちの声が人間の言葉と同じように聞こえていた。

彼女の耳がこうなったのは、現地の人間と一緒に暮らす体験をするためだと言ってソロモン72柱の石柱である悪魔バルバトスが訪れてからだ。

バルバトスはリンが保護猫 NPO でボランティア活動をしていると知ると、こちらの方がよいだろうと言って彼女に動物の声が人間の言葉と同じように聞こえる魔法をかけた。

以来、リンの耳は動物たちの鳴き声がすべて人間の言葉と同じように聞こえる耳。例えば道端にいるカラスがカーと鳴けば『誰かいなかー！』というように聞こえる。

スズメたちが集まりながらチュンチュンと鳴く声は『おはよう』と挨拶を交わしながら昨日ちゃんと眠れたかどうか？危険なことはなかったかどうかのやり取りに聞こえる。

もちろん、ボランティア先に行けば猫たちの声がそこら辺中から聞こえるようになる。

『なんだ、この間のやつか』

NPO のドアを開けた時声だったのでそちらを振り返ると事務所の看板猫であるコタローがいた。

「コタローちゃん、おはよう」

そう挨拶をしながら軽く頭を撫でるとリンの手の下でコタローは『うざいなあ』
と言いながらまんざらではない様子。

「コタローちゃん、嬉しいのならちゃんと嬉しいっていえばいいのにー」

リンがそう言えばコタローは『フン!』と言って事務所の奥へと行った。

リンの世界はバルバトスの登場以来こんな状態になっている。

リンが一日のボランティア活動を終わらせ自宅のドアを開けると、玄関のすぐにあるキッチン椅子に黄色いカナリアが止まっていた。

「バルバトスただいま」

リンがカナリアにその声をかけると、カナリアは一瞬光りロビンフットのような
服装をした茶色い髪の小さな男になった。

「おかえり。今日も猫たちとは楽しくしてきたのかい？」

「うん。保護した妊娠中の猫が赤ちゃんを産んでね。すっごく可愛かった」

リンはそう言いながら部屋着を手にとると着替えるために脱衣室に向かった。

着替えを済ませ部屋に戻ると、バルバトスがじっとこちらを見ていた。

「なに？」

「リン。明日出かける用事はある？」

「え？ないけど？」

「よかった。リンの後ろにバスが何かとぶつかる様子が見えたんだ」

「えーなにそれ？交通事故？」

「僕が見たビジョンは交通事故というのかい？」

「そう。交通関連の事故だから交通事故」

リンは冷蔵庫を開けると朝に食べ損ねた焼き鮭とビールを二本取り出した。

「たまにはバルバトスも一杯やろうよ。焼き鮭は嫌いじゃないでしょ？」